

共に

塩尻市市民交流センター・生涯学習部
男女共同参画・若者サポート課

塩尻市大門七番町3番3号
TEL：(0263) 52-0280 内線3135
FAX：(0263) 54-2705
Eメールアドレス：kyoudou@city.shiojiri.lg.jp

特集

私たちが活動し、得てきたものを繋げたい ～ 塩尻市女性団体の活動から「温故知新」男女共同参画の未来へ～

令和元年度末、市の男女共同参画活動に関わりのある方々に、本誌特集記事の内容を伺うアンケートを実施しました。結果は、人権課題として「子どもの人権」に関わる課題が最も多く挙げられました。男女共同参画に直接的

に関係する課題としては、「男女共同参画活動上の課題」(女性活躍現場における女性団体構成員の固定化・高齢化と女性団体の消滅傾向の顕著化)を挙げられた方が多数おられることが分かりました。

人権課題である「子どもの人権」が最も多くの方々の関心事ではありましたが、本年度の人権週間中に開催する「豊かな心を育む市民の集い」での講演を「こども食堂」の目指すもの～子どもの人権を守り、地域の共生を育てる「まちのプラットホーム」～を予定し、本年度5つの重点項目の一つに挙げている「子どもの人権」について扱います。

そこで、本年度の特集では「男女共同参画活動上の課題」を取り上げました。



昭和62年5月1日「婦人だより」は初の市女性情報誌として教育委員会文化教養担当が第1号発行。

平成4年7月15日第11号から一般公募で「でこぼこ」に名称変更し、教育委員会婦人室が発行。「シリーズおじゃまします」で市内の女性団体紹介を掲載開始(第1回しおじり女性会議)

平成6年に全国で初めて「男女共同参画都市宣言」を行い、男女共同参画先進地であった塩尻市は今、「どんな女性団体があり、どんな活動をしているのか」を知り、今後の男女共同参画の方向(未来)を探りたい。そのことが本誌の使命でもあり、本年度の男女共同参画キャッチフレーズ「そっか。いい人生は、いい時間の使い方なんだ。」へと繋げたい思いでいます。



平成14年の6月15日第33号から名称「でこぼこ」は一般応募の中から選ばれた「共に」に変わりました。平成28年の第63号から年1回11月の発行。



私たちが活動し、得てきたものを繋げたい ～「温故知新」男女共同参画の未来へ～

「住みよい地域づくりのために」

塩尻市連合婦人会
代表 渡邊 富久さん

塩尻市連合婦人会について代表の渡邊富久さんにインタビューをさせていただく予定でしたが、ご都合により取材質問項目を書面でお送りしてご記入いただきました。塩尻市連合婦人会は、昭和36年2月24日に会則を制定し発足しました。長年にわたり、長野県や全国との連携の下、活動を推進してきました。多くの会員と共に様々な事業に取り組んできました。

Q：設立の趣旨（目的）は、どのようなことだったのでしょうか？

A：会則から、市各地区婦人会との連携と協調により、婦人相互の資質と政治的・社会的地位の向上につとめ、健康で明るい家庭づくりと住みよい地域づくりに努力するとともに、文化の発展と平和な社会に役立つことを目的としていました。

Q：連合婦人会の主な事業は、どのような内容であったかを教えてください。

A：目的を達成するための事業内容は
①講習・講演・研修会・各種グループの育成等、婦人の資質向上をはかり、生活の合理化をはかるための事業。
②青少年の健全育成に関する事。
③婦人の社会活動に関する事。
④会員の社会福祉事業に関する事としてきました。

Q：塩尻市連合婦人会の、他市町村や県・国の連合婦人会との連携について教えてください。

A：現在、塩尻市連合婦人会の事業が休止している状況ですので、長野県連合婦人会や全国地域婦人団体連絡協議会との交流や連携などが途絶えている状況で、塩尻市連合婦人会独自の活動となっています。

Q：塩尻市連合婦人会としての独自の活動は、どのような活動ですか？

A：月に1回の役員会を行い、皆さんの元気な顔を見て昼食をとりながら親交を深めてきました。また、全国短歌フォーラムin塩尻では、長年にわたり「赤彦汁」を作り、振る舞ってきました。2～3年前までは、枕を作り桔梗荘に贈りました。この様に地域社会に役立つことも実践してきました。

塩尻市は平成6年全国に先駆けて「男女共同参画都市」を宣言しています。当時は様々な女性団体が活動していました。ところが、現在女性団体は数少なくなり、残っている団体はどれも会員数が激減しています。どの団体も新しい会員を増やせなくなった事や、世代交代が難しくなった事が大きな原因だと思います。各女性団体の発足時は「夫が外で働いて、妻が家で育児をする」という考え方がまだ一般に残っていて、家に居る女性が、かなりの数存在していたのだと思います。時代と共に女性も働くことが当たり前になり、物理的に活動できる人材が少なくなってきたのだと思います。

さらに、わざわざ集まって情報交換をしなくてもネット社会では情報が溢れるほど有り、自分の必要な情報だけ選べるようになった事です。このような社会変化から集まっての情報交換や学習会を持つ必要性すらなくなってしまっているのかもしれない。知識やインフォメーション（情報）を得るだけなら個人でも「出来る事」が多くなった現在ですが、ある目的を持って集まり、団体を作り、集会を開く事は知識や情報を得ること以上にエモーション（情緒・感情・感動）を伝え合い、絆を感じるには必要不可欠な事だと思います。

【やさしく女と男情報誌「共に」

編集委員：横山 裕美】



男女共同参画都市宣言記念碑

あらゆる分野に男女が共に参画し支え合う社会への門と、人間として持っているやさしさ、強さを一つの「塊」として表現しました。

作者 山崎 豊三

私たちが活動し、得てきたものを繋げたい ～「温故知新」男女共同参画の未来へ～

「みんなが輝くために」

塩尻市女性団体連絡会

代表 竹原 桂さん（インタビュー）

塩尻市婦人団体連絡会は、市内の各種婦人団体が連携を深め、婦人の地位向上を目指し、昭和50年に結成されました。婦人という言葉は時代背景とともに、「女性」と表現することが一般的になり、それに伴い「塩尻市女性団体連絡会」に名称変更しました。

Q：設立の趣旨と活動内容はどのようなことだったのでしょうか？

A：昭和50年頃になっても、婦人の社会的地位はまだ低く、その情勢を切り開きたい機運が高まりました。様々な婦人団体が社会をよりよく変えたいと多様な活動をしていました。「婦人の地位向上を図り、明るい地域づくりを目指すため、市内の関係する婦人（女性）諸団体と連携を深める必要」が提案され活動を始めました。最初は、団体の活動内容の情報交換が主で、参加が出来る行事等があれば、お互いに関わり合う活動が盛んでした。

Q：本連絡会の主な活動は、どのような内容であったかを教えてください。

A：それぞれの団体が企画した学習会や研修に参加することが、日々の生活の気づきや仲間作りに大変役立ちました。5年位前までは毎年、連絡会主催行事として様々な方に講師を依頼し「あしたを拓く女性のつどい」の講演会を市民に参加を呼び掛けて行っていました。



竹原 桂さんインタビュー風景

Q：本連絡会の組織や活動の継続などについて教えてください。

A：当初は、参加者の年代の幅が広く、男性も加入している団体もあり、活発な印象がありました。年数が経過するうちに団体によっては高齢化が進み活動に支障が生じ始め、その団体の役員になることが体力的に難しくなりました。会費も負担と感じ、参加団体は減っていきました。さらに、働く女性が増え、時間が限られ活動はより困難になり、お互いの活動の情報交換は会合をしなくてもSNSで可能となるなどにより、新しい参加者の加入呼びかけは容易ではなくなりました。現在は活動を続けている団体で、明るい選挙推進に関する啓発活動（チラシ等の配布）や、市の各種審議会に委員として参加しています。

Q：今まで連絡会としての活動でどのような実績がありますか？

A：今では当たり前のことですが、市議会議員や農業委員に多くの女性が参加する事について取り組み、実現してきました。最初の頃は、理解を深めていただくことが難しかったです。

Q：これからの活動については、どのようなお考えがありますか？

A：男女の差は少ないと思う人もいますが、コロナ禍で問題の大きさがより現れてきました。男女の賃金の差は大きく、以前から心配していたシングルマザーの困窮状況が日々伝えられています。また、世界経済フォーラムが発表する、ジェンダーギャップ指数（GGI：経済・政治等の男女格差指数）は、世界153カ国中の121位（2020年現在）で格差が大変大きく不平等となっています。このようなことから、女性問題に限らずみんなが輝くため、様々な課題に取り組む新しい団体がでてくることを願っています。

女性の地位向上に向けて先頭に立ち、多くの団体の連携に貢献されていますが、「令和の時代になっても、日本の男女格差は世界の中でも極めて大きいこと」を懸念されていました。

格差は僅かなことと感ずる場合もありますが、コロナ禍や自然災害などで男女の隔たりの大きさがより際立ちました。多様な新しい団体の必要性についても、このような時期だからこそその助言であり、有志の糧となる情報発信の大切さを強く感じました。

【やさしく女と男情報誌「共に」編集委員：小松洋子】

私たちが活動し、得てきたものを繋げたい ～「温故知新」男女共同参画の未来へ～

「男女共同参画の推進を目指して」

元しおじり女性会議

元代表 宮崎 小里さん（インタビュー）

「しおじり女性会議」は平成4年に設立されました。この年は、塩尻市が第二次女性行動計画「塩尻女性プラン」を策定した年でした。その後、塩尻市が男女共同参画都市宣言をし、国が男女共同参画社会基本法を制定するなど行政が動き出した時でもありました。その様な情勢の中から、「しおじり女性会議」は個人の資格で女性の立場から男女共同参画社会の推進を目指して活動されてきました。設立25周年を迎えた平成28年には、「男女共同参画の推進に貢献した」旨で市長表彰を受賞されています。

しかし、平成29年3月、その活動に終止符が打たれました。長きにわたり「しおじり女性会議」の中心で活躍されて来た宮崎さんに、活動についての「意義」とその「思い」を伺いました。

Q：設立の趣旨と活動内容はどのようなことだったのでしょうか？

A：男女平等社会実現のために、皆さんと25年共に活動してきました。自主運営組織として、男女が抱える問題について広く話し合える場をつくり、家庭・職場・地域において調和のある関係で、豊かに暮らせる社会を創ることを目指してきました。月1回の会報と年4回の情報紙は、行政のホットな情報を幅広く全会員にお知らせし、行事に参加された会員の声も載せてきました。皆が参加する「一人の百歩より、百人の一步」をモットーとした活動でした。

Q：本会議の主な活動はどのような内容であったかを教えてください。



宮崎 小里さんインタビュー風景

A：講演会やコンサート、研修会等は情報収集、企画、運営すべてを行い、会議参加を呼び掛けて話し合いを進め、行政との意見交換や市審議会で発言してきました。女性がエンパワーメントを高めるために研修や施設見学等で見聞を広め学ぶことで、女性たちの気づきやつぶやきを行政に意見として伝えることができたと思っています。個人の資格で意見が言えるためには会費を頂き自主運営してきたからこそ自立し、自由に意見することができました。地域で活動している女性の発掘をコンサートや講演会で行い、応援もできました。広報紙には行事に参加し幅広い意見を持ち、考えをまとめ文章にすることで、皆が自信をもち意識も変わって来たと自負しています。読んでくれた人達にも思いが浸透してきました。市政との意見交換会を通じて行政に風穴を開けた事項も多数あったのです。

Q：なぜ本会議の活動を終えられたのか、今後男女共同参画をどのように推進して行くべきかについて教えてください。

A：会議への参加や、イベントへの集客が難しくなったこと、IT社会になり紙ベースの広報紙が任を果たし終えたということと、高齢化が進んだことが挙げられます。さらに後継者不足は、近頃の「組織に属しても代表を作りたいがらない」風潮が起因したものでしょう。

市政では女性の意見は必要です。国が女性役員・議員等の登用率30%をあきらめても地域から始めるべきです。男女の役割が固定化している地域から、仕組みを変えて平等の意識を広め、共同参画を進めていきたいと思います。女性が社会に進出して来た現代だからこそ、ボランティア体制だけでなく、手当支給があると会議にも出易くなります。地域から実力のある女性を引抜いて欲しいですね。

男女平等は、人権問題です。男性女性どちらも共に考える社会になることを願っております。

お話を伺って、かつて初めて社会に出た時、地域の一員となった時の女性として自分の立ち位置の違和感を思い出しました。社会の仕組みの中でしまい込んできた「思い」です。「男女平等の社会とは何か」ちょっと感じたことを意見として形にしていって、そんな組織があった事を知りました。先輩方の一步を後戻りさせない、さらに前に進めるために何をすべきか、「男女共同参画社会」が自分の問題として意識できる様に、本情報誌「共に」が一役を担えらるゝとしたら、皆で考える一手となつてほしいと思います。

【やさしく女と男情報誌「共に」編集委員：吉江令子】

ひとひと
女と男21ワーキンググループの活動紹介①
シンポジウム 子育ては地域みんなで
～子育て世代は何に困っている～ 栗岩 美保

「子育て」をテーマとしたシンポジウムは、子育てに関わる4人のパネリストを迎え、ファシリテーターに内山二郎先生をお招きし、各議題についてディスカッションし、WG員・地域・他市からの参加者(38名)と共に議論を深め合いました。現代の核家族化により子どもを巡る環境は著しく変化しており、地縁の繋がりがや共通の価値観も希薄化され、個人と地域の関わりが大人も含め減少してきている現状があります。以前は遊びの中から人間関係を学ぶ場を持つことができた時代から、現代は情報社会に埋もれ、正しい情報の選択能力も欠如し不安に煽られトラブルも多く、長野県の10代の自殺率は全国の中でもトップクラスと言われています。現代を巡る社会環境の中で、見えてきた課題は山積みで「地域で子育て」を支援する中で必要なことは、社会変化に対応できる大人が、積極的に地域と繋がり、地域を知り、子どもと共に地域との繋がり意識を持つことが出来るということです。地域主体で子どもの環境作りに取り組み、この時代を生き抜いていくために、何が必要かお互いに学びあう努力が必要です。子どもを支えるには、親を育てる環境作りも必須であり、一緒に考え学び合い共感し、自信に繋がる環境作りや、親自身も自分自身を認める事が出来る事が子育てには必要と強く感じました。最後に多様化するこの時代に生きている幸せと、心の豊かさを日々追求していく事が大切だと感じます。子育てに正解はないのかもしれませんが、それぞれに大人が子どもの力を信じ共感することがスタートであり、顔の見える人との繋がり大切さを学んだシンポジウムでした。

シンポジウム コミュニケーション溢れる地域作りを

家事・育児や仕事に夫婦関係、親の介護や子どもの受験など、子育て世代を取り巻く悩みをみんな考えます。

令和元年11月4日 広丘「えんてらす」

「子育て」
シンポジウム風景



ひとひと
女と男21ワーキンググループの活動紹介②
北小野地区 井戸端会議
～北小野地域の活性化～ 宮崎 小里

北小野地区において「井戸端会議」が開催されました。内容は「なぜ地域役員に女性が少ないのか」「女性役員が増えるとどんな地区になるのか」また、「地域で女性が活躍できる状況ができるか。アイデアとか方策」について、ファシリテーターに内山二郎先生をお迎えして、ワークショップ形式で話し合いがなされました。参加者(地域:区長会・民生委員など女性13名 男性14名、WG:9名)からは、「地域の会議の中に女性がいると、会が和やかになる」「地域の規約や組織が変わらないと女性の出る場がない」「名前が挙がるのは男性ばかりである」「女性は地域の生活者のことを良く知っている。しかし、女性が役員

「井戸端会議」気軽に和気あいあいと皆で語り合う

平成15年から市内10地区にて「地域づくり」をテーマに行ってきています。今回は6年ぶりに北小野地区で開催しました。

令和2年2月18日「北小野公民館」

北小野地区
「井戸端会議」風景



となると家事との両立が難しい」また、『地域のことは、男性に任せておけばよい』との昔からの意識が地域にあり、改革が必要」との意見がありました。私は、まず家庭から変えていくことが大切だと思います。なかなか生活習慣を変えられないが、人々の意識は変わってきていると思います。男女共同参画社会の実現のためにも、地域役員への女性の登用率を30%以上との目標を本気で考える時期にきていると思います。地域の役員の中に女性が全体に関わることができれば、視野の広い地域の運営ができると思います。高齢化率の高い地域では、世代を越え、性別を越え、お互いに協働の精神で、地域の責任ある役職を担っていく時期に来ていると思いました。

ひとひと
女と男21ワーキンググループご参加のお誘い

「市民から行政へ、男女共同参画に関するワーキンググループが必要」との提案から「男女共同参画に建設的な意見を持ち、ボランティアで企画・運営に携われる人」を公募しています。現在までの活動は各地区での「井戸端会議」「講演会」「コンサート」等を行ってきました。ぜひ皆様も男女共同参画に関わる啓発事業の企画・運営と人権に関わる啓発事業への協力、自己研鑽と共に社会貢献に携わってみませんか?

豊かな心を育む市民の集いを開催します。

塩尻市では、全市民の人権意識の向上と、男女共同参画社会の実現を目指し意識改革に努めています。しかし、依然として人権上の偏見や差別は社会生活全体の中に存在します。本年度は特に、子ども達の生活にも暗い影を落とす虐待やいじめ、貧困など子ども達の人権が脅かされている現実が顕在していることに注目したいと思っています。

そこで、私たち一人ひとりが人権を尊重する社会の意識や重要性を正しく理解し、暮らしの中で人を大切にする心を育てていくために、「豊かな心を育む市民の集い」を開催し、講演会では「子ども食堂」の活動から学び、人権意識の向上に迫りたいと思います。

○期 日 令和2年12月5日(土)

午後1時30分～3時30分(開場午後1時)

○場 所 レザンホール 中ホール

○主 催 塩尻市・塩尻市教育委員会

○内 容 ※感染症予防対応で開催いたします

(1) シトラスリボン運動の紹介

(2) 人権啓発講演会

演 題 「いばも食堂の目指すもの」

～子どもの人権を守り、地域の共生を

育てる「まちのプラットホーム」～

講師：NPO法人ホットライン信州

専務理事 青木 正昭さん

○託 児 1歳以上から未就学までのお子様を対象。

無料で託児できます(要予約)

○入場無料：(予約不要)

※手話通訳が付きます

※総合文化センター1階では【デートDV】パネル展及

び「叫ぶ芸術」パネル展を開催します。

おすすめブック(書籍)紹介

心が折れそうな夫のための

モラハラ妻 解決 BOOK

理由がわかればうまくいく！

夫婦問題カウンセラー 高草本 陽光

左右社 1700円

夫婦相談の40%は男性。4つのタイプ別に妻の特徴や対処方法を紹介。人は変化する生き物です。男女共同参画社会の中で、この妻にどう対処して良いのかが見えてくるのではないのでしょうか。

ひれふせ、女たち

ケイト・マン 著 小川芳範 訳

慶應義塾大学出版会 3520円

日本のジェンダーギャップ(男女格差)は過去最悪でした。その原因を著者は「日本が強烈なミソジニー(女性嫌悪)だから」と日本の男性社会を痛烈に批判している。「現実」を「知る」ことが社会変革への希望と誘う著書。

編集後記

やさしく女と男情報誌「共に」編集委員 有賀 則正

特集企画で、塩尻市連合婦人会・塩尻市女性団体連絡会・(元)しおじり女性会議取材しました。各団体の活動は、女性の地位向上や社会参加を目指しながら、社会や生活上の問題の検討や提言、啓発や文化活動など多岐にわたりました。紹介した団体は、解散又は活動を縮小していますが、この企画が、単なる回想ではなく、男女共同参画社会実現に向けて「共に」の精神を市民の皆様と考える契機になればと思います。

昭和から平成へ、経済的安定は、人々の社会的関心を希薄にしました。情報化の進展は、大量の情報を提供する一方で、人々を分化させまとまり難しくしました。これらの事柄は女性団体が、活力をなくした要因の一つでもあります。それでも人々の日常生活にはさほど支障もなく、豊かで穏やかな時代を送ることが出来ました。

今この時代に陰りが見えてきました。世界を席卷する新型コロナウィルス、常態化する自然災害、少子高齢化、後退する経済、貧困と格差…。過度な自己愛は、自国(自己)中心主義や対立を生み、偏見や中傷といった心の問題もあります。どれもが解決や解消など容易ではなく、誰もが無視できない多くの問題があります。

コロナ禍にあって、海外の女性リーダーたちの迅速な対応と、私権制限の真摯な要請や国民に寄り添った語り掛けが評価されました。危機に対する多様性や柔軟性の大切さを示唆しています。困難を内包する未来を前に、私たちは、女性も男性もなく「多様な人が、多様な知恵や力を出し合う」ことが求められていると強く感じます。

企画にあたり、竹原 桂さん(塩尻市女性団体連絡会)と宮崎 小里さん(〔元〕しおじり女性会議)から長時間にわたり貴重なお話をお聴きできました。渡邊 富久さん(塩尻市連合婦人会)からは、書面でご説明いただきました。まだまだお話をお聴きたいとの思いがあります。お三方のご協力に、心から感謝いたします。